



▲妻入り、茅葺き屋根の高月町の古民家。入り口の上部に前垂れと呼ばれる棟飾りが見られる。

私の住む湖西の高島から湖北地方を眺めると、琵琶湖に浮かぶ竹生島の彼方、伊吹山から金鷺岳に連なる山並みに抱かれるように平野が広がっている。湖西からは琵琶湖を北廻り

湖北の懐かしい未来をつくる 古民家再生

古民家再生プロジェクト



古民家に暮らす、ということ

その土地で育った木材をつかい、風土に適った建て方をされた民家は、長年の風雪に耐えながら、柱や梁に磨きをかけてきました。

いま、幾星霜を生きながらえてきた昔の家を、その魅力を活かしつつ、

現代に住まいやすい家として、再生する動きが注目されています。

古くなくても住きものは佳し。それを再生して活かせば

生活文化、建築文化を守り、伝える

職人の技を残す

地域の森を守り、木を育てる

魅力のあるまちを、風景をつくる

住みよさを高める

古色と新味の融合が生まれる

観光の大きな要素となる

など、好ましい暮らし方が期待できます。

今回の特集では、古民家再生の実例をあげ

住み継がれる家とはどういうものかを考えながら、湖北の民家のこれからを提案したいと思います。

一級建築士・滋賀県企画調整課

清水 安治



①屋根の形式が入母屋造りの草葺で、入り口が妻入り。

②屋根の表面上部に太い葦や麻殻を扇型に並べたものや菱型に草の尻を浮かせた前垂れと呼ばれる棟飾りがある。

③間取りは、三間取広間型と呼ばれる、にわ(土間)、だいご(にゅうじい土座)、おくのま・なんどからなる。

④屋根の小屋根組みは二本の丸太の合掌と梁とからなる合掌組み。

いくつかのトンネルをくぐって、西浅井、そしてほとんど木之本にたどり着くが、そこに点在する集落の風景は、湖西のそれとは一見したところ大きくは違わない。しかし、注意深く観察すると、それぞれの集落には緩い勾配の瓦葺き屋根に混じって、急な勾配の茅葺きの民家が湖西に比べて明らかに多く残り、農村の風景の中にとっかかりと根付いている。それらは、すでに茅葺き屋根の上にとタンを被っているものが多いものの、屋根の下のかまどや囲炉裏の煤で黒く煙された柱や梁が力強く交錯する室内空間を容易に想像できる。

この今も多く残る湖北の地の古民家は「余呉型」もしくは「伊香造り」と呼ばれる特有の形式が多く、民家研究の分野では「合掌造り」や「甲造り」などと並ぶ日本民家の代表的なものとして知られている。

余呉型民家の特徴

余呉型民家の特徴について、民家研究者は以下のとおり指摘している。

一方、このような学術的な観点だけでなく、私を感じる魅力は別のところにもある。たとえば、平面形式が「にわ」と「だいご」が一体となった三間取りとしているため、一般的な四間取りの形式のように各室が仕切られず、木造在来工法の住宅としては、広めのゆったりとした空間を見せている。さらに、この広い空間を構成するために、太い柱や梁が交叉し、豪快な軸組が圧倒的だ。この機能的とともに、力強さを兼ね備えた空間は、現代の住宅ではめったに見ることができない。

試してみよう
七本鎗のすれ味
清酒

五臓六腑に
七本鎗
七本鎗

滋賀県伊香郡木之本1107
露田酒造有限公司
TEL・0749(82)2013
FAX・0749(82)5507

古民家に新しい命を吹き込む

一級建築士 「匠工房」 島田 廣巳さん

家には家族の思い出が詰まっている

長年住み慣れた家には、家族の思い出が詰まっている。柱のキズを見ると、兄さんがチマキを食べながら、背の高さを測ってくれたことを思い出すかもしれない。畳のシミを見ると、母さんが夜なべをして、手袋を編んでくれたことを思い出すかもしれない。

先日、若いころ住んでいた街へ久しぶりに行ってみて、寂しい思いをした。住んでいたアパートがなくなり、広い道路が住宅街を突っ切るようになっていたのだ。あたりの風景は一変していて、当時の記憶をたどることができなかった。

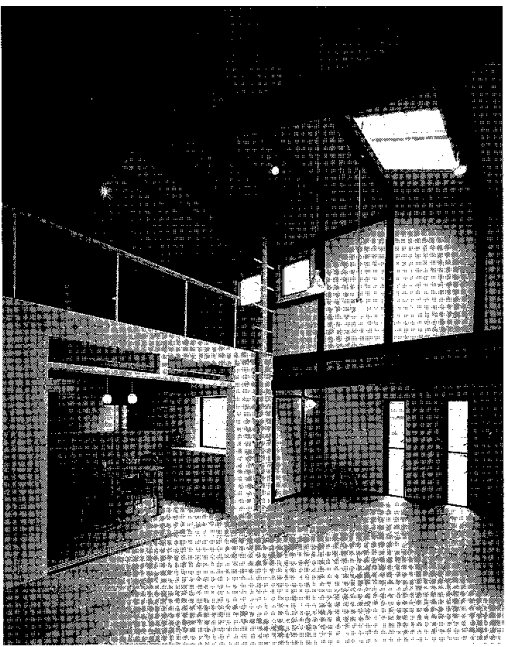
住まいも、街の風景と同じだ。育ってきた歳月のさまざまな記憶が、いたるところに詰まっている。それらの思い出を残しながら、現代のライフスタイルに合った快適な生活をしたい。古くなった家をなんとか再生して住みたい。そう思っている人は多いだろう。

「そんな面倒なことをせんと、新築したらどうですか。きれいで便利で快適でっせ」
知り合いの大手さんや工務店に相談すると、そんな答えが返って来そう。そこで、やっぱり残す値打ちはないわな、とすぐに諦めてはいけない。住まいを再生できるかどうかは、住む人の家に対する愛着と誇りによって決まるのだ。

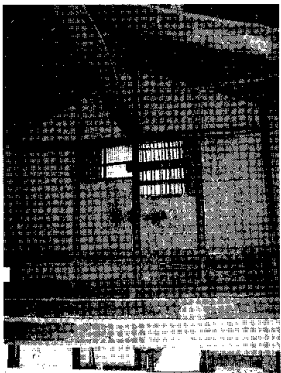
知り合いを通して民家再生の依頼

米原市柏原に事務所を構える匠工房の島田廣巳さん（54歳）は、古民家を再生したいという願いを形にしてくれる建築家の一人である。柏原の町には、霊仙山を源流とする幾筋かの清流が流れている。とりわけ町の北を流れる天野川は、水が豊かで蟹が乱舞する川として名高い。島田さんの事務所は、天野川のそばに建っている。古い町並みが続く中山道もすぐ近くだ。

岐阜県出身の島田さんが、建築事務所を辞



▲ガラス瓦を用いた採光で明るい部屋に生まれ変わった大垣市東前の家



▶改装前の大垣市東前の家

建物が持っている迫力が違った

二階の広い空間を生かすには、できるだけ部屋を壁で仕切らずに、天井の小屋組みを見せるのがベスト。島田さんはそう考えた。施主と打ち合わせをすると、びったり意見が合った。

「施主の方もおもしろい人でしてね。冬は寒いかも、と言うと、冬寒いのは当たり前や、の一言。それがよかつたんです」

できあがってみると、それまで島田さんが手がけた新築の住宅とは、建物が持っている迫力が違った。ホンモノの材料が持つ力があ

ったという。

「合板やビニールクロスなどの新建材が似合わないんですね。床も壁も、ムクの木や自然の壁材しか使えない」

昭和三十年代まで、日本の家は「木と紙でできた住まい」だったが、効率性や経済性などから、次第に工場生産のフローリング、ビニールクロス、アルミサッシが使われるようになる。しかし、新建材で建てられた住宅は、新築のときが美しさのピークだ。歳月を経ると、その輝きは見る見るうちに色あせていく。

もちろん、ムクの素材は自然のものだから、品質に差があるし、手入れにも手間がかかる。

與那覇湖 真鴨の里

湖北の厳寒のなかで育った真鴨は、肉がよく引き締まり、味に深みが増す。同じ鴨を食すならぜひこの地の鴨鍋料理でお楽

納骨券 宿泊プラン 9800円

滋賀県伊香郡 西浅井町雲浦580
Tel 0749-89-0350
Fax 0749-89-1363
http://www.koi.jp/suzuro/

しかし、歳月を経ることに味わいを増し、愛着がわいてくる。それが家の記憶となって、住む人の心に残っていくのだ。

再生は住む人の愛着が決め手

長浜市加田町の古民家再生を手がけて、島田さんは住まいに対する考え方が変わったという。立派な家を残すことも大切だが、それ以上に天然のムクの素材を使ってこそ、家に対する愛着がわく。

家への愛着ということで、島田さんは典型的な二つの例を話してくれた。ひとつは東近江市での古民家再生の話。永源寺の古い農家住宅を実家に持つ母と娘がいた。築百年以上経った茅葺住宅で、四畳半が四間の小さな住まいだ。彼女たちは、家族の思い出が詰まった家をなんとか残したいと、何軒もの大工さんや工務店に相談したが、取り合ってくれなかった。諦めかけていたところ、島田さんに出会った。島田さんは家を調査して、一千万円くらいかければ直せると考えたが、話を聞くに予算は数分の一しかないという。工期と材料を切り詰めても、取まるかどうか不安だったが、結局引き受けることになった。要因は、彼女たちの家への愛着の強さだった。

もうひとつの例は、湖北のびわ湖に近い町にあった住宅。古からの名家で、島田さんはその建物をぜひ残したいと思ったそうだ。施主にぜひ再生すべきだと勧めたが、結局は建て替えることになった。要因は、施主がム